第九講　論理的文章の読解⑧

Step 1

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

かつてのモラトリアム(注)というのは、半人前扱いで肩身が狭く、権利も大きく制限され、不自由で居心地が悪いため、若者はそんな状態を脱して早く一人前の大人になりたいと思った。［A］、かつてのモラトリアムは、義務はないけど権利もなく、一刻も早く抜け出したい不自由な時期だった。

それに対して、現代のモラトリアムは、義務はないのに権利はあるため、いつまでも抜け出したくない自由で気楽な時期といった感じになっている。［B］、アルバイトでもすれば、消費者としての権利を享受できる。定職に就かず、稼ぎがすくなくても一人前に意見を主張することができる。

そうした変化には、物質的に豊かな社会、価値観の多様化、技術革新による変動の激しい社会といった要因が関係しているといってよいだろう。

IT(注)革命など、科学技術の絶え間ない革新により、人々の働き方もライフスタイルも目まぐるしく変わり続け、まったく先が読めないために、将来も視野に入れた最適の職業選択が困難になった。そんな時代ゆえに、無理に自己確立などせずに可能性を残しておきたい、とりあえずは自由気ままに漂っていたいと思うのも不思議ではない。

こうして1<u>モラトリアム心理が世の中に蔓延(まんえん)し、決断を先延ばしにしていつまでも自由に漂っている若者が増えてきた</u>というわけだ。

一人前の大人になること。これは自己の確立と言い換えることもできるが、それには何らかの社会的役割を担(にな)うことができると周囲から認められることが必要となる。そこに、さらに現代では、「自分らしく」ということが加わる。単に何か社会的役割を担えればいいとい

うのではなく、自分らしい役割を引き受けたいという思いがある。

ここで、アイデンティティについて、考えてみよう。

エ(注)リクソンのいうアイデンティティには、つぎの三つの側面が含まれるといえる。

①自分というまとまりがあり、それが時間的に連続性を保っているという感覚

②そのような自分らしさを他者も認めているという感覚

③自分が社会的役割を担う存在になっているという感覚

①は、自分がそのときどきで気まぐれな行動を起こしているのではなく、何らかの一貫性があり、それが自分らしさだといった感じを指している。

ここで注目したいのは、②と③だ。これらが意味するのは、アイデンティティ確立の条件として、他者からの承認が必須だということ、それには社会の中で何らかの役割を引き受けることが必要になるということだ。

アイデンティティの発達についての研究を精力的に進めている心理学者クロガーも、「エリクソンにとって、アイデンティティの最適な発達は、(注)コミュニティの中に個人の生物学的・心理的能力および関心によく『フィットした感じ』を与える社会的役割や適所を見つけることを含むものである。」と述べている。

このように、社会の中に自分の能力や関心によくフィットした役割や居場所が見つかったとき、アイデンティティが確立できたことになる。つまり、アイデンティティの確立のためには、他者から［Ⅰ］が得られ、かつ自分らしい［Ⅱ］を担えるようになることが必要なのだ。▲

そうは言っても、自分はどう生きるべきか、どんな生き方が自分らしいのかという問いに答(こたえ)を出すのは容易ではない。しかも、周囲から認められ社会に役立つ生き方という点とも折り合いをつけなければならない。

モラトリアムを維持しながらも、限りなく自己実現を求め続ける人物。それが新たな時代の適者かもしれないといって、プロテウス的人間という生き方を描いたのは社会学者リフトンである。

プロテウスというのは、自分の姿をヘビやライオン、竜、火、洪水などに変幻自在に変えることはできるのに、自分自身のほんとうの姿

を現すことのできないギリシア神話の海神の名前だ。

プロテウス的人間とは、環境の変化に応じて自分自身を変身させ、そのつど自己の可能性を最大限発揮しようとするタイプを指す。

このように一見すると一貫性がなく、バックボーンが欠けた人物は、変動の少ない伝統的社会の価値観からすれば、主体性がなく、安定せず、信頼できないといって否定的に評価されたはずだ。

でも、現代ではどうだろうか。こちらがある仕事に身を捧(ささ)げようとしたところで、働き盛りの頃にはその仕事がなくなっているということだって、十分あり得るのだ。このような変動の激しい時代を生き抜くには、まさに2<u>プロテウス的な生き方</u>が求められているのではないか。

職業選択がなかなかできない若者が増えているのも当然のことだ。こんなに変動の激しい時代なのに、仕事を一生ものなどと大げさに考えるから決断ができなくなる。とりあえずは今の状況で最善と思える選択をすればよい。

判断を誤ることはよくあることだし、やってみなければ自分に合うか合わないかなんてわからない。どうしても合わなければ変えればよいだけのこと。状況が変われば、それに応じて仕事を変えることもあるだろう。それは、根気がないなどと非難されることではない。状況が変わったということは、判断の前提が変わったわけだから。

そんなふうに状況に応じて新たな価値観や仕事に柔軟に自分を適応させていく。しかも、いい加減とか中途半端というのではなく、それぞれの時点では自分が傾倒する役割に没頭し、全力で立ち向かう。ただし、そこに自己のアイデンティティを限定せずに、別の可能性にも自己を開いておく。気になることには目を向ける気持ちの余裕をもつ。このような生き方こそが、変動の激しい現代にふさわしい生き方と言えないだろうか。

ただし、プロテウス的生き方を押し通すには、自己を防衛したりせず、あらゆるものに心を開き、一面的にならないのはもちろんのこと、幅広く揺れ動き、あらゆる局面に身をおきながらも、けっして統合力を失わないような強さと柔軟性が求められる。

会社や組織のような所属集団や肩書(かたがき)に心の安定を求めることなく、その時々に自分がとくに価値を感じるものにすべてをぶつけていく生き方は、一貫性がなく意志が弱いとか気まぐれなどとする保守的人間の評価とは逆に、じつは強靭(きょうじん)な意志、繊細で鋭敏な感覚、宙ぶらりんの状態をもちこたえられる忍耐力がなければならないのである。

だれにもいろんな可能性がある。でも、3これまでは、ひとりの人間のもつ多様な可能性の中からひとつを選び取ると、他のすべてを捨てるというのが一般的だった。

アイデンティティを確立するというのは、それ以外の可能性を切り捨てること。それによって自己を特定の社会的役割に縛りつけること。そのようにみなされてきた。大人になるというのは、ある意味では諦めることだ。そんなふうにも言われてきた。

でも、僕たち人間は、そんな単純にはできていない。非常に多面的な存在だ。技術的なことに興味をもつこともあれば、芸術的なものに惹(ひ)かれることもある。科学的なことに関心をもつこともあれば、文学的な世界に引き込まれることもある。現実的な社会問題が気になることもあれば、メルヘン的な世界に浸りたくなることもある。そんな自分をたったひとつの生き方に封じ込めるなんて不可能だ。僕自身、いつもそんなふうに思って生きてきた。

自分をひとつの可能性に封じ込めるような生き方を貫くには、他の自分を抑圧し続けなければならない。そのために多大なエネルギーを消耗する。そもそも固定的なアイデンティティというものによって多様性をもつ自分の人生を単線化するのは、労働の分業によって社会を安定化させるためとみることができる。

ところが、社会そのものの変動が激しくなり、労働の形態も著しく変化する今日、無理して自分の人生を単線化したとしても、社会のほうが変わってしまい、適応できなくなるということも起こってくる。

それならば、なにも無理をして自分をひとつの道に封じ込めなくてもいいじゃないか。そう考える若者が増えてくるのも当然だろう。そこまで整理して考えているわけではなくても、どこかでひとつの社会的役割に徹しきれない自分をもてあまし気味になる。

大人になれない若者とか、モラトリアムから抜け出そうとしない若者の増加は、現代という時代状況が生みだした現象といえる。もともとモラトリアム的な生き方は、夏目漱石(なつめそうせき)の描く世界の高等遊民(注)のように、特権階級でないと享受できないぜいたくなものだった。

豊かな時代。価値観が多様化した自由な時代。変動の激しい時代。そんな時代状況のせいで、4自分を封じ込めない生き方が大衆化した。このように考えると、大人になれない若者の増加という現象にも、否定的側面だけでなく肯定的な側面もあるように思われる。

そんな視点からすれば、今の時代に求められるのは、個人をひとつの道に封じ込めるような硬いアイデンティティではなく、さまざまな可能性に開かれており、試行錯誤や方向転換を続けても壊れないような、いわば柔らかいアイデンティティをもつことなのではないだ

ろうか。

（榎本博明(えのもとひろあき)「〈自分らしさ〉って何だろう？」より。一部表記を改めたところがある。）

(注)
モラトリアム＝青年が社会人としての義務を猶予されている期間。
IT革命＝情報技術の発展や普及に伴う社会の急激な変化のこと。
エリクソン＝精神分析学者（一九〇二〜一九九四）。
コミュニティ＝地域社会。共同体。
高等遊民＝高等教育を受けながら、職業に就かずに暮らしている人のこと。

(ア) 本文中の［A］・［B］に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 A つまり B たとえば
2 A さて B まさか
3 A しかし B ところで
4 A おそらく B または

□

(イ)　――線１「モラトリアム心理が世の中に蔓延し、決断を先延ばしにしていつまでも自由に漂っている若者が増えてきた」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1　消費者として一人前に意見を主張しすぎるあまり、アルバイトによる社会との関わりだけでは物足りなくなり、多くの若者が物質的な豊かさを求めて自己を確立しておきたいと考えているから。

2　義務はないが権利のある現代のモラトリアムが自由で気楽な時期になっているうえに、社会が変わり続けて先を見通せないので、多くの若者が将来の可能性を残しておきたいと考えているから。

3　居心地の悪かったモラトリアムが気ままで楽しい時期に変化したうえに、ＩＴ革命の出現によって世界中の人々と交流できるので、多くの若者が最新の情報に触れておきたいと考えているから。

4　文学的な世界や芸術的なものに浸りたくなるあまり、将来を考えて定職に就いたあとでも、多くの若者が文学館や展覧会などを巡る至福の時間をいつまでも確保しておきたいと考えているから。

(ウ)　本文中の Ⅰ ・ Ⅱ に入れる語句として最も適するものを、 Ⅰ については**漢字二字**で、 Ⅱ については**漢字五字**で本文の最初から▲までの中からそれぞれ抜き出し、そのまま書きなさい。

Ⅰ

Ⅱ

(エ) ――線2「プロテウス的な生き方」とあるが、それはどのような生き方か。次の①、②の条件を満たし、**全体で五十五字以上六十五字以内の一文**で書きなさい。

① 文末は、生き方。で終わること。これも全体の字数に入れること。

② 「アイデンティティ」という語を用いること。

(オ) ――線3「これまでは、ひとりの人間のもつ多様な可能性の中からひとつを選び取ると、他のすべてを捨てるというのが一般的だった。」とあるが、「これまで」の状況を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 個人が他の可能性を捨てて特定の役割を担うことによって、社会を安定させてきたということ。

2 個人がすべての可能性を封じて無欲に生きることによって、他者の評価を得てきたということ。

3 個人が特定の可能性を全力で追求することによって、自分の幸福だけを考えてきたということ。

4 個人があらゆる可能性を模索することによって、社会をよい方向に発展させてきたということ。

(カ) ――線4「自分を封じ込めない生き方が大衆化した。」とあるが、その説明として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 生き方を模索していく過程で、自分を抑圧する生き方を受け入れる代わりに、試行錯誤や方向転換を求められてもつぶれないように柔軟に対応する若者が増えてきたということ。

2 伝統的社会の価値観に合わせているうちに、自分の考え方や行動様式が無意識のうちに形成されていき、一人前の大人の役割を果たすことのできる若者が増えてきたということ。

3 現実的な社会問題やメルヘン的な世界など、自分の興味を絞ることができない若者が、心の安定を求めて会社や組織のような所属集団や肩書を頼るようになってきたということ。

4 変動の激しい時代には労働の形態も著しく変わるため、若者が無理に自分の人生を単線化することなく、ひとつの生き方に縛られない選択ができるようになってきたということ。

(キ)　本文について説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1　大人になれない若者が急増している現象に対して危機感を抱きながら、価値観の多様化した時代において自己実現が難しいことをふまえ、確固たるアイデンティティの枠組みを提案している。

2　モラトリアムから抜け出さない若者について否定的に論じながら、高等遊民の生き方をすべての人たちが享受できる豊かな時代をふまえ、理想的なアイデンティティのあり方を提案している。

3　かつての若者と現代の若者のモラトリアムの違いを比較しつつ、変動の激しい時代にふさわしい生き方について学者の見解を引用しながら、新たなアイデンティティのあり方を提示している。

4　若者の多面的な存在を尊重してきた過去を振り返りつつ、職業選択が困難な時代にふさわしい生き方について若者の意見をふまえながら、普遍的なアイデンティティの枠組みを提示している。

【神奈川県】

Step 2・3

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

　私たちは、他者とつながり、生きるために必要なものを、他者との関係の中で㋐交換している。それは、単に物質的なことがらの交換だけではなく、何かをしてあげるといったことや、情報、気持ちの交換も含まれる。私たちが得るものや失うものが、他者との関係の中で決まり、他者の言動に依存する。したがって、他者の言動を予測し適切に反応すること、また自分にとって望ましくなるよう統制を㋑試みることは、大げさに言えば、私たちの生存にかかわることなのだ。だから、私たちは他者の心を読もうとする。心が他者の言動を生み出す源泉であるという枠組みのもと、言動がなぜ生まれるのかを知ろうとする。他者を、意図を達成するためにふるまう合理的なエージェントとして、また、安定した態度や特性を表現する言動を行う一貫性のあるエージェントとして認知することで、理解や予測、統制が可能な存在とすることができるのである。

　また、それに加えて、他者に心を認めることは、共感的理解に基づく関係を築いたり、他者を正当に扱い、害や苦痛を与えることのないよう、道徳的なコミュニティの中におくために、必要とされることでもある。このことは、先に述べた予測や統制の必要に関する議論とは異なり、私個人がそのことですぐさま利益を得るという性質のものではない。しかし、①私たちは、多数の他者と共に、相互作用を長期にわたって繰り返しながら社会の中で生きている。したがって、社会全体の安全や㋒安寧を保つためには、互いが他者に対して支援を提供する一方、加害を避けることが重要になる。一人一人が、他者の喜びや苦痛を理解し、それを踏まえたふるまいをすることで、全体の安心、安全という利益が達成できる。さらに、他者の心にある意図や動機を読み、その善悪を評価したうえで、賞賛や非難を与え合うことにより、他者に対する善い意図や動機が促進される一方、悪い意図や動機が抑制されることになる。これは、社会全体が道徳的秩序のもとに存続する基盤となる。

　進化心理学的な議論は、自分に利益をもたらす人や、不利益をもたらす人を同定するためには、周囲にいる他者の動機や意図、特性など、心的な属性を理解することが必要であり、そのような能力を獲得した個体のほうが生存に有利であるということを主張する。敵や裏

切り者を認知できれば、その場から逃げたり、近づくにしても注意を払ったり、食糧など生存に必要なものをその他者から隠したりすることで、対応ができる。また同様に、他者の意図や動機を、善い・悪い、正当・不当などの次元から直感的にとらえて、その評価に基づきすばやく対応できる個体が多数いる集団は、そうでない集団よりも、秩序ある社会を維持することができ、存続しやすくなる。もちろん、私たちが進化の過程で心を読む志向性を獲得したかどうかについては、直接その歴史を検証できない。その意味では、②このような議論は壮大な「物語」に過ぎないのかもしれない。とはいえ、現代に生きる私たちが、他者の心を日常的に読むこともまた事実であり、社会的な動物としての人間が、生きるための必然として心を読む志向性を獲得したと考えること自体が、私と他者をつなぐ力を持ち得るのではないだろうか。

　私たちの心は、自分だけしか知りえないという意味で、個に閉じたものだ。しかし、その心はまた、他者の心を読むための機能を持つものとして、私たちに備わっている。その機能ゆえに、私と他者はつながれ、閉じた個から他者へ、さらには社会へと広がっていく。他者を理解し意味づけること、共感的理解に基づく関係や秩序ある社会集団を維持することは、③他者の心を読むことの上に成り立っている。私の心が他者の心を読み、他者の心が私の心を読むことにより、私たちそれぞれは、個であることを超えて、社会という、人と人とのつながりの中に組み込まれていくのだ。

（唐沢かおり「心はいかに自己と他者をつなぐのか」より）

（注）エージェント＝行為者。

Step 2

1　本文中の次の漢字の読み方を書きなさい。

㋐交換　㋑試みる　㋒安寧

㋐ ［　　］

㋑ ［　　みる］

㋒ ［　　］

Step 2

2 ① 私たちは、多数の他者と共に、相互作用を長期にわたって繰り返しながら社会の中で生きているとあるが、このように「他者とのかかわりの中で生きる人間」は、本文中では何と表現されているか。本文中から**六字**で抜き出しなさい。

Step 2

3 ② このような議論は壮大な「物語」に過ぎないのかもしれないとあるが、これはどのようなことを表しているか。その内容として最も適しているものを次から一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア 他者の意図を善悪などの次元から直感的にとらえてすばやく対応することが秩序ある社会の維持につながるという主張は、その実現が困難であるという点で、はかない夢でしかないのかもしれないということ。

イ 他者の意図を理解できる個体の多い集団が歴史上存続しやすかったという主張は、他者とのつながりが生存に必要であるように錯覚させるという点で、都合のよい空想でしかないのかもしれないということ。

ウ 人間が生きるための必然として他者の心を読んでいるという主張は、その正当性を人々が広く認知しているという点で、もはや自由に想像する余地のない歴史的事実でしかないのかもしれないということ。

エ 私たちが長い歴史の中で他者の心を読む志向性を獲得してきたという主張は、その過程を実際に確かめることが不可能であるという点で、根拠のない作り話でしかないのかもしれないということ。

ア　イ　ウ　エ

Step 3

4 ③他者の心を読むとあるが、本文中では、他者の心を読むことが可能となるのは、私たちが心を持つ他者を、どのように行動するものとしてとらえているからだと述べられているか。その内容についてまとめた次の文の［　］に入る内容を、本文中のことばを使って**四十五字程度**で書きなさい。

他者を［　］ものとしてとらえているから。

Step 3

5 本文中で筆者は、どのようにすることが秩序ある社会集団の維持につながると述べているか。その内容についてまとめた次の文の［a］、［b］に入れるのに最も適しているひとつづきのことばを、本文中からそれぞれ**十字**で抜き出しなさい。

他者に心を認め、共感的理解に基づく関係を築いたり、他者を［a］の中において正当に扱ったりすることに加え、他者の心にある意図や動機を読んで［b］ことによって他者に対する意図や動機を促進したり抑制したりすることが、秩序ある社会集団の維持につながる。

a

b

Step 3

6　次は、他者の心を読むという行為に関連して、他者の心を読むときの二つの方法について述べたものである。方法Aまたは方法Bのどちらかについて利点と問題点とをあげながら、他者の心を読むということについてのあなたの考えを、あとの原稿用紙に**三百字以内**で書きなさい。

方法A　自分の心を手がかりにして他者の心を読むという方法。他者がおかれている状況に自分自身をあてはめたうえで、これまでの経験をふまえて自分自身の考えや感情、態度などを把握し、他者も自分と同じような心の状態であると考えて、他者の心を理解しようとする。

方法B　他者の心や他者のおかれた状況の特性についての知識を適用して他者の心を読むという方法。自分自身が経験したことのない事柄でも、ある状況が引き起こす心の状態や、心の状態と行動との関係などについて、一般的な知識を活用して他者の心を理解しようとする。

・原稿用紙の正しい使い方にしたがって書くこと。
・題名や氏名は書かないで、本文から書き始めること。

100

【大阪府】

300

200

〈Note〉

第九講　論理的文章の読解⑧

Step 1

一

解答

(ア) 1　(イ) 2　(ウ) Ⅰ、承認　Ⅱ、社会的役割　(エ) それぞれの時点では自分が傾倒する役割に没頭しつつも、そこに自己のアイデンティティを限定せず、別の可能性にも自己を開いておく生き方。（65字）（同意可）　(オ) 1　(カ) 4　(キ) 3

解説

(ア) Aでは、「かつてのモラトリアム」について前文で述べたことを、わかりやすくまとめている。Bでは、「義務はないのに…自由で気楽な時期といった感じ」について例を挙げている。

(イ) 直前の「こうして」が指す内容をおさえる。社会が目まぐるしく変わり続けるので「まったく先が読めない」という時代で、「無理に自己確立などせずに可能性を残しておきたい」という心理になっていることを指す。「義務はないのに権利はある」という「現代のモラトリアム」が、そうした心理を受け入れやすくなっていることもおさえる。

(ウ) 「エリクソンのいうアイデンティティ」の「三つの側面」のうち、②と③に注目。「アイデンティティ確立の条件」として、「他者からの…必須だということ」「それには社会の中で何らかの役割を引き受けることが必要になるということ」を挙げている。「何らかの役割」について、先に「自己の確立」の条件として、「何らかの…を担うことができる」ということを挙げていることに着目する。

(エ) 「プロテウス的人間」が「環境の変化に応じて自分自身を変身させ…最大限発揮しようとするタイプ」の人間であることをおさえる。「こんなに変動の激しい時代」での生き方を述べ、「そんなふうに状況に応じて…目を向ける気持ちの余裕をもつ」という「生き方」を示していることにも着目してまとめる。

(オ) 直後に、アイデンティティを確立することは「それ以外の可能性を切り捨てること…そのようにみなされてきた」と説明している。

また、ひとつの可能性だけを選ぶ「これまで」のような「固定的なアイデンティティ」について、「多様性をもつ自分の人生を単線化するのは…社会を安定化させるためとみることができる」と述べていることをおさえる。

(カ) ここでの「自分を封じ込めない」は、「無理をして自分をひとつの道に封じ込めなくてもいい」ということである。「社会そのものの変動が激しくなり、労働の形態も著しく変化する」という状況で、こうした「生き方」が広まったことを表している。

(キ) 「モラトリアム」の変化について説明し、「エリクソンのいうアイデンティティ」や、社会学者リフトンの「プロテウス的人間という生き方」などを取り上げて、今の時代に求められるアイデンティティを示している。

Step 2・3

二

解答

1、㋐ こうかん　㋑ こころ(みる)　㋒ あんねい　2、社会的な動物　3、エ　4、意図を達成するために合理的にふるまい、安定した態度や特性を表現する一貫性のある言動を行う（44字）（同意可）　5、a、道徳的なコミュニティ　b、賞賛や非難を与え合う　6、(例) 方法Aでは、自分の経験をふまえて他者の心を読むことから、他者の喜びや苦しみを自分のものとしてとらえられるという利点がある。自分自身の経験にあてはめ、そのときの心情を思い起こすことで、他者の心情をより深く理解することができる。しかし、他者の経験と自分の経験がまったく同じであることはあり得ない。また性格や考え方も異なっている。そのため、この方法で他者を的確に理解できるとは限らない。自分にあてはめることで思考の範囲が限定され、他者の状況が見えにくくなるということが、問題点としてあげられる。自分の経験を参考にしながら、それにとらわれ過ぎず、他者の立場にたった理解を心がけていくことが必要だと思う。（298字）

解説

2、「社会の中」で「他者」とかかわっていることを表す語と、人間を生き物として表現している語の組み合わせに着目する。

3、「私たちが進化の過程で心を読む志向性を獲得したかどうか」ということについて、「直接その歴史を検証できない」ため、作り上

げられた「物語」に過ぎないのかもしれないと考えていることをおさえる。

4、「私たち」が「他者の心を読もうとする」ことについて、「他者を、意図を達成するためにふるまう…エージェントとして認知する」ことで、「理解や予測、統制が可能な存在とすることができる」と説明している。

5、a、「他者に心を認める」ことについて、「共感的理解に基づく関係を築」くことと、「他者を正当に扱い、害や苦痛を与えることのないよう…の中におく」ことをあげている。b、「他者の心にある意図や動機を読み…与え合うこと」により、「他者に対する善い意図や動機が促進され…抑制されることになる」と述べている。